

# 「明日の京都を考える」

霊明神社七代神主 村上 壽 延

## 戦没者慰霊は日本古来の伝統 宗派宗教とは全く無縁の世界

——この1月14日の小泉首相の靖国神社参拝に、中韓両国は早速に抗議するなど、執拗に内政干渉を繰り返し、また、国内では靖国参拝訴訟が起こされるなど、靖国騒動は果てしがありません。戦死者への慰霊は、その国の歴史や文化と密接に関わっているものであり、外国からとやかく言われる筋合いのものではないと思いますが、そもそも、靖国神社の起源は「招魂社」にあり、その淵源は、江戸時代に、神道葬を起こし、その神霊を祭祀してきた「霊明神社」（霊明舎）にあると言われています。そこで、まず霊明神社の由来からお話を伺いしたいと思います。

村上 明治維新に先立つことおよそ60年の文化6（1809）年、私どもの先祖にあたりますが、御所では光格天皇のお側に仕えていた国学者の村上都愷くにとけいが京都東山りょうざん霊山の地に、正法寺末寺の清林庵から千坪の土地を買い求め、そこに祠宇を設けて神道による葬祭を始めました。それが霊明舎であり、霊明神社の始まりです。

——その当時は、「宗門人別帳」にも見られるように、仏式以外の葬儀でもすれば、キリシタンその他の邪宗徒として幕府にいらまれた時代です。神道葬を始めたのは、徳川幕府の宗教政策に対する重大な反逆行為で、相当な覚悟が要ったでしょうね。

村上 それまで、日本人は死ねば、神官や社家も仏式で葬儀を行い、神道家自身、死は穢れたものであるとして



葬儀を避けていました。氏子たちも身内に死者が出ると、その年内は鳥居をくぐるのを遠慮していたほどです。国学の大家である平田篤胤もその著『出定笑語』の中で「(仏法は)今かやうに天下に拡がって彼の切支丹の騒ぎ以来、この坊主どもに宗旨を改めさせらるゝ事なり、又死たる時は僧が来て改むるも変死を御吟味なさらんが為で、どうにもならぬこと云々」と嘆いています。ただ、神道葬そのものは、近世において皆無ではなく、水戸や薩摩などでは藩の方針として行われていました。しかし、一応幕府の許可は得てあるものの、異端的印象はまぬかれがたく、少し後の時代の天保年間には、水戸の徳川斉昭がその藩政改革の

〔略歴〕村上 壽延(むらかみ ひさのぶ)  
大正10年、京都市生まれ。昭和16年、京都国学院卒業。  
平安神宮、伏見稻荷大社、安井金毘羅宮などに奉職し、  
昭和26年、霊明神社社家就任。同37年、同神社代表役員に就任し、現在に至る。

一つとして領内仏事の破棄を行った廉で幕府によって処罰されています。藩がバックにあつてさえそうですから、まして一個人が自己の学説に従つて神道葬を始めるのは、今の我々には想像もつかないほど大変なことであつたらうと思います。実際、幕府の出先機関である京都所司代に生まれ、迫害も受けています。『霊明神社記録』によりますと、表向きは時宗の葬式のようにして、実は神道葬を行うなど、数知れぬ苦心のあとが伺えます。

——都愷は、そうした迫害にもめげずに、神ながらの道の宣布と尊王のために身を挺したわけですね。

村上 この19世紀初頭の文化・文政という時期は平田



篤胤らの影響でいわゆる草莽の国学が全国的に形成され始めた時にあたり、国学、神道の歴史の上ではなかなか重要な意味を持っており、霊明神社の創建も京都独自の伝統の上に立つと同時に、そうした全国的な動きの一環を構成していたと考えられます。ただ、都愷は国学に志深く常に門人を集めて神道を講ずる一方、諸国へ出向き、「我国は神国なれば誰人も神ながらの道によるべきこと」と士分町人の別なく神道を説いたといえます。そうした中で、門弟たちの「死ねばやはり成仏して仏になるのではないか」「せっかく神ながらの道に入りながら、仏式で葬式をさせられるのは遺憾」といった疑問や嘆きに応え、その信仰を徹底させるためには、如何に仏教全盛の世とは言え、神道葬を起さなければならぬことに着眼し、覚悟を固めたと思えます。都愷の思想は、その子美平・孫都平や曾孫の歳太郎にも受け継がれて行くわけですが、都愷の起こした神道葬という一つの事業が後年、維新の功臣の神霊を鎮め、招魂社を建てて奉祀する濫觴となったのです。

——勤皇の志士たちを埋葬するようになったのは何故でしょうか。

村上 文久2（1862）年、勤皇の志厚き国学者で、大津で客死した長州清末藩の船越清蔵をこの神道葬墓地に埋葬したのが初めてですが、それより追々、勤皇有志の殉難者を埋葬するようになり、維新志士の墓地となってい

きました。当時の各藩の志士はよくこの霊明舎に会していたようですが、死後は神道によって葬られることを願っていたといえます。「死して護国の神となる」勤皇の志士たちは、「霊山の村上が為す皇国の手振り」で霊明舎に祀られるのを本懐とし、無上の名誉に思ったのでしょう。こうして、霊山には長州、水戸、薩摩の諸藩をはじめ、全国各地の志士が葬られ、すべて同形の簡素な小墓石が林立するようになったのです。霊明神社では、現在でもその神霊をお祀りするとともに、一般向けの神道墓地があり、神道葬祭を行っております。

——霊明舎で最初の全国的な招魂祭が営まれたのは、文久2年12月のことですね。

村上 あくまでも私祭でしたが、当日は、篤胤門の国学者で、忠死者の招魂を熱心に唱えていた神祇伯白川家の古川躬行をはじめ、京都に在った津和野藩国学者の福羽美静、長州藩士世良利貞、近江の西川吉輔、京都の長尾武雄ら66名が参集して、「報国忠士」の招魂祭を執行しています。この慰霊祭は京都に集まっている志士たちに強い印象を与え、霊明神社や霊山が志士の心のふるさと「聖地」として意識されるきっかけにもなったようです。幕末時代、こうした霊明舎の在り方は、時の京都町奉行所や会津の見回り組、それに新選組の弾圧を受けるところとなり、都平と歳太郎は、慶応3年10月14日に徳川慶喜が大政を奉還

するまでの4年間、幕吏の追捕を受けて、各地を転々と逃げ回らなければならなかったといえます。

——維新の業がほぼ成った明治元年5月10日には、東山に祠宇を設けて、国事殉難者や戦没者を合祀せよ、との新政府太政官の布告が出ましたね。

村上 「祠宇」とは「招魂社」のことであり、その社地が東山靈山に定められたのは、この地が志士たちの墓所であり、聖地であったからに他なりません。その年の6月頃には招魂社（現京都靈山護国神社）の造営工事が着工の運びとなり、12月15日に招魂祭が行われていますが、奉仕したのは村上都平です。それまでは、志士たちを祭る社殿はなく、招魂祭のつど仮の齋場をつくって祀っていました。明治天皇の招魂社創設の意向が伝えられますと、太政官布告に前後して、靈山山上に各藩の招魂場建設が相次ぎました。長州藩のみは、幕末すでに招魂場を設けていましたが、同年中にさらに2ヶ所の招魂場を造っています。そして、明治天皇が事実上、東京奠都となり、翌明治2年6月29日、九段坂に創立された招魂社で招魂祭が挙行されました。この「東京招魂社」が10年後の明治12年6月に「靖国神社」と改称され、現在では、幕末殉難者から大東亜戦争戦没者まで246万6千余柱が祀られています。

——江戸時代に迫害の中で靈明舎を創建した都愷の「神ながらの精神」が靖国神社の創立に繋がったといって

も過言ではないですね。

村上 一つの事業の起こる時には、必ず先ずその事業の根底をなす一つの精神があります。その精神がその当時の時勢と相接触して一つの事業が起こります。時勢が動くにつれ、事業も変転しますが、しかし、その精神は終始一貫、事業の根底に横たわっています。靈明舎の史蹟をみますと、都愷の「神ながらの道」の発揚の精神が先ずあり、幕府の政策上、国民を挙げて仏法寺院に隷属せしめていた時代においては、仏法を排し外夷を斥け神葬を起し、尊王敬神の思想の徹底を計りました。時代が降って幕末に至り、勤皇志士が天朝に身命を捧げて活躍した時代には、王事に斃れた志士は、これを神霊として、皇国の手振り」にて埋葬祭祀することとなったのです。靈明舎に伝わる「子孫へ申伝へ之事」と題する反古に「儒者仏者などと無益の宗論不可致」とありますが、神道は我国の「神ながらの道」であって、古から我々先祖が営々として歩んでこられた道であります。仏教儒教と対立するような、そんな小さく狭いものではない。仏教儒教の根底をなすものであるという考えです。靈明舎の祭祀は今日かれこれ論議されているような宗派宗教ではありません。靖国神社の慰霊の精神も、これと同じことで、太古より続いている日本の伝統であって、軍国主義などと言われる筋合いのものとは、全く無縁の世界であると思います。